

研究タイトル：

## 古代日本語文法の研究



氏名：	青野順也 / AONO Junya	E-mail：	aono%tokyo-ct.ac.jp (%を@に置換して下さい。)
職名：	講師	学位：	博士(文学)
所属学会・協会：	日本語学会, 萬葉学会, 國學院大學国語研究会		
キーワード：	古代日本語, モダリティ, テンス・アスペクト		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の歴史</li> <li>・国語表現</li> </ul>		

### 研究内容： 古代日本語のテンス・アスペクト, モダリティ

研究対象としている上代(奈良時代以前および奈良時代)は、漢字を使った日本語表記の試みが様々なかたちで展開している最中であり、また、中古(平安時代)以降にも受け継がれていく文法形式が新規に成立するなど、言語変化の考察にあたってたいへん興味深い時期である。加えて上代語文献資料には、中古(平安時代)では使われなくなる文法形式が散見されることから、通時的変化の考察対象としても適している。

こうした関心のもと、上代の文献資料『万葉集』を主たる調査対象として、次の(1)~(3)について研究を進めてきている。

- (1) 主観・時間を表す文法形式の意味用法
- (2) 文法形式の成立過程
- (3) 文法形式成立の先後関係

(1)については、たとえば「む」などは主観を表し、「～たり・り」や「～つ・ぬ」は時間を表す形式なのであるが、どのような意味用法のもと使用されていたのかを研究してきている。

(2)については、上代は現代日本語「～た」の前身である「～たり」が形成された時期であることから、その形成過程と、「～たり」と同義とされる「～り」の意味用法についても研究してきている。

(3)については、上代語文献には見えるが中古語文献では見えなくなる文法形式として、たとえば願望の「な」及び希求の「ね」があるが、どちらがより古くから存在していたのか、また、それぞれどのような意味用法のもとで使用されていたのかを研究してきている。

以上、古代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ形式の研究をとおして、古代人の「ものの見方」を明らかにしていく。

### 提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	